

“The Jichikai”・・・JET参加者から見た自治会

「自治会」、「町内会」・・・呼び方はいろいろですが、日本ではお馴染みの地域住民による組織です。類似の組織は一部のアジア諸国にはあるようですが、世界的にはあまり例がないようです。

地域に暮らし活動するJET参加者の中には、仕事で、あるいはまた私生活で、自治会に関わる方も多いようです。

自治会行事でブラジル人市民に親しみを

静岡県西部にある製造業が盛んな磐田市のCIRは、ブラジル出身の佐久真・ハイミ・薫・土田さんです。

ハイミさんは、市内の各地域で数ヶ月ごとに開催される、多文化共生のための自治会長の情報懇談会や多文化共生社会取組推進地区会議などに毎回参加しています。また、自治会行事の一つである老人会の集いにも参加し、出前講座を開いてブラジル文化を紹介しています。

情報懇談会では、ブラジル人の国民性について約20分間の説明をするそうです。日本ではブラジル人市民に関してゴミの分別や騒音問題などがよく指摘されるとのことですが、ハイミさんはブラジル人の国民性や風習、日本の文化や習慣との違いなどを説明することで誤解を解いて、自治会とブラジル人市民の架け橋になれることを目指しています。

また、老人会ではスライドやクイズなどを通してブラジル人市民に親しみを持ってもらったり、「簡単なポルトガル語」を教えたりして、地域の多文化共生に少しでも貢献できることを目的としています。

ハイミさんは、「文化や習慣の違いで生じる問題や誤解などはまだまだありますが、CIRとして自治会の行事にお招きを頂き、母国であるブラジルのことを紹介できる機会を頂ける事にとっても感謝しておりますし嬉しく思います。『ブラジルのことがもっと知りたくなった』とか『ブラジル人に声をかけてみる』と言った言葉を頂くたびに、国際交流員としての活動にやりがいを感じています」と語ってくれました。

自治会に参加して地域住民として認知

北海道立札幌白陵高校のALT、ウィリアム・レーマンさんはアメリカ出身。札幌市郊外にある高校のすぐ近くに住んでいます。

ウィリアムさんは来日直後に、近所の方と校長先生に誘われたのがきっかけ

で自治会に初めて参加しました。最初は「自治会」がどのようなものかよく分からなかった彼ですが、新年会やゴミ拾い、花の植樹などを通して次第になじんでいきます。

教頭先生とともに参加した新年会は、自治会長、地元の経営者や年配の方などのあいさつの後、宴が始まり、伝統的な踊りや出席者の方々の母校の旧校歌などが披露されました。次第に宴席の輪がほどけ、年配の方と会話をするようになります。地元の方は、ウィリアムさんを「新しい仲間」として暖かく迎えてくれ、今では道で会っても自然に笑顔で挨拶をする間柄になっています。

ゴミ拾いについては、回覧板で周知され、自治会の役員の方々が手袋やゴミ袋などを渡すだけでなく自家用車でゴミ袋を回収してくれたことは、ウィリアムさんには新鮮な驚きだったようです。また、ゴミを拾えば当然手は汚れますが、地域がきれいになることの喜びは、自身の手の汚れとは比較にならない大きなものだとは彼は感じています。

また、今年5月には、幹線道路の街路樹の下に花を植えましたが、この時も自治会の役員の方々の活躍ぶりを目の当たりにしました。ウィリアムさんの住む地区では、割り当ての600本の花の苗を200人の生徒の協力を得て植えましたが、今ではきれいに咲き誇る花を見るのが楽しみだと彼は語ってくれました。「残念ながらこの地区にずっと住み続けることはないが、自治会の活動は本当に楽しい」と、地域にすっかり溶け込んだウィリアムさんは話しています。

The logo for CLAIR, featuring a stylized blue flower or leaf design above the word "CLAIR" in a bold, blue, sans-serif font.